

# 児童の自己肯定感と表現力を高めるための 特別活動の授業改善

～タブレットPCと電子黒板の活用をとおして～

自己肯定感 特別活動 タブレットPC 電子黒板

土浦市立土浦小学校

〒300-0044  
茨城県土浦市大手町13-32

<http://www.tsuchiura.ed.jp/~dosho>

## 1. 研究の背景

本校は、2年前の宍塚小学校との統合を機に校舎を新築し、オープンスペース完備、全教室暖房完備、全学級に電子黒板配備、音楽室と連結した多目的室、図書室と連結したコンピュータ室（デスクトップ型コンピュータが40台配備されているが、タブレットPCは配備されていない）などをもつ新しい学校として生まれ変わった。そして、国語、算数、理科、社会科などでデジタル教科書を使って授業を行うなど、知識理解の習得を中心に、学力向上の手立てとしてICTを活用してきた。しかし、教師側からの伝達の手段としての活用が多く、恵まれた環境を生かして、児童の思考力・判断力・表現力を高めたり、児童の自己肯定感を高めたりすることが課題となっている。

## 2. 研究の目的

児童の表現力とともに自己肯定感を高めるために、特別活動においてICTを積極的に活用していきたいと考えた。実生活の課題を解決するために、互いのよさや可能性を發揮できるような集団活動を充実させていくことを大切にしたい。その際、特別活動の特質を踏まえ、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つの視点から、「ICTでつながる」「ICTでかかわる」「ICTで振り返る」をキーワードとして、学級活動、児童会活動（委員会活動）、学校行事の場面で、実践を積み重ねていく。今回は、特に、児童自身が活動の様子を電子黒板に提示したり、知らせたいことをタブレットで記録し、話し合い、修正し、提示したり、テレビ会議を使って情報交換・発信したりしていくことにした。以上のことから、本研究では、電子黒板、テレビ会議、タブレットPCなど、ICTをどのような場面で利用すると効果的なのかを検証し明らかにすることを目的とした。それにより、特別活動をとおした集団づくりの推進に悩んでいる学校に少しでも役立てるように、本校での成果を広く伝えていきたいと考え研究を行った。

## 3. 研究の経過

時期	取組内容	評価のための記録
4月	児童の実態調査	アンケート調査（児童） パフォーマンス調査（児童）
9月	電子黒板を利用した委員会活動紹介	写真・映像（児童）

10月 12月		アンケート調査（児童） 教師の所感（ポストイット）
10月	電子黒板を利用した係活動紹介・当番活動紹介	写真・映像（児童） アンケート調査（児童） 教師の所感（ポストイット） インタビュー調査（実践者）
7月 11月	いじめに関するパネルディスカッション	写真・映像（児童） アンケート調査（児童） 教師の書簡（ポストイット） インタビュー調査（実践者）
3月	電子黒板、タブレット PC を利用した異学年交流	写真・映像（児童） アンケート調査（児童） 教師の書簡（ポストイット） インタビュー調査（実践者）
2月	総合学習と特別活動の合科的実践成果の発表 テーマ「未来の土浦を私たちの手で」	写真・映像（児童） アンケート調査（児童） 参観者からのコメント（保護者） インタビュー調査（実践者）
9月 10月	タブレット PC を利用した自己評価・相互評価	写真・映像（児童） アンケート調査（児童） 教師の書簡（ポストイット） インタビュー調査（実践者）

#### 4. 代表的な実践

##### (1) 電子黒板を利用した委員会活動紹介（異学年とつながる） 第5学年と第6学年

自分の発表を映像で確認したり、友人と話し合ったりすることで、プレゼンテーション能力と自己肯定感を高めるために、録画した画像を電子黒板で視聴させた。全校集会などの場面でプレゼンした内容を動画で記録しておき、各学級で繰り返し視聴した。

全員の前で呼びかけるということに加えて、電子黒板で動画などを再生し、お知らせなどは常時呼びかけるようにした。また、作成したプレゼンテーションを配信して全校集会を行うなど、より分かりやすくするよう工夫した。

##### (2) 電子黒板とタブレットPCを使った当番活動の紹介（友達とつながる）第6学年の例

学級活動で行っている当番活動の紹介をより分かりやすくするために電子黒板とタブレット PC を活用した。当番活動を行っている様子をタブレット PC で画像や動画に記録させ、活動の様子を視覚的に提示しながら紹介させるようにした。

事前準備期間をとり、児童が当番活動の様子を互いに観察しながら、タブレット PC で撮影する活動と、紹介原稿を作成する活動を行った。タブレット PC は、学級に複数台を常時置いておき、児童がいつでも使えるようにした。紹介原稿は、教師が作成したひな形に基づいて、児童が記入するようにした。内容は以下の5項目とした。

- 紹介する当番名
- 当番に所属する児童の氏名
- 実際に行っている仕事内容
- 頑張っていると思うところや見習いたいと思うところとその理由
- 当番の児童へのメッセージ



図1 当番活動発表の様子

発表は、学級活動の1単位時間を用いて、録画した画像や動画および紹介原稿をもとに、互いに当番活動の取組を紹介し合う活動を行った。(図1参照)

児童が他者の取組の様子を観察することで、児童相互の励ましや認め合う場面が多く見られ、児童が当番活動に意欲的に取り組みやすい雰囲気を作ることができた。

他者紹介の実践を通して、自分の活動が他者のためになっていると感じた児童が多く、また、他者の活動に対しても肯定的に感じた児童が多かった。普段は意識して見ることのない、他者の活動の様子をじっくりと観察することで、自己有用感が育まれた。

自分の当番活動を紹介してもらって感じたこと、および他者の当番活動を紹介して感じたことに関する記述を類型化し、自己有用感の観点から得点化したものをクロス集計した結果、自己有用感が高い、つまり自己を肯定的に捉えられる児童は、他者のことも肯定的に捉えられていることが示唆された。

(3) いじめについて考えよう(他校とつながる)

代表委員の児童(第5学年、第6学年)

全児童夏季休業期間に代表委員会の児童と近隣の小学校の児童と中学校の生徒会の生徒でリーダー研修会(異学年集団でのグループ協議、テーマ:「いじめのない学校づくり」)を行った。(図2参照)

そして、全学年で人権について考える集会(学年集会)を行ったあと、全校集会を実施した。代表委員の児童は、リーダーとしての自覚が高まり、学級をまとめていく大切さを感じる中で、クラスの中での存在感を高めることができた。



図2 3校合同リーダー研修会の様子

(4) 電子黒板、タブレットを利用した異学年交流(つながる・意見を広げる)第2学年と第3学年

3年生の児童が2年生の児童を教室に招き、1年間の学習のようす、特徴的な学校行事や学年行事などをプレゼンテーションした。どのような内容を紹介したらよいか、どのように説明すれば分かりやすいか、進級する際の不安を軽くし、楽しみをもてるようになるかななどをグループ毎に話し合い、発表した。3年生の児童は、発表することができた。



図3 スーパーマーケット見学の様子  
(タブレットPCを活用して記録)



図4 異学年交流の様子  
(タブレットPCと電子黒板を利用して発表)

(5) 総合的な学習と特別活動の合科的実践成果の発表（地域とつながる・広げる） 第6学年

6学年の総合的な学習の時間では、「未来の土浦を私たちの手で」をテーマに、地域の人々を講師として招き「街づくり」の工夫についてお話をいただき、調査に行き確かめる、修学旅行で訪れた鎌倉の街づくりと比較したりするなどの体験活動を重視した学習を行った。調査の際には、タブレットPCを活用し発表する際の資料となる写真を撮影しその場で確認、編集するようにした。まとめの段階では、鎌倉の街の調査でわかったこと踏まえて提言したり、昔の人から受け継がれている郷土の人々の努力を継続していくためにはどのようなことが重要か考察したりした。そして、調査・研究したグループごとに、プレゼンテーションソフトを使い、級友と保護者の前で発表した。



図5 電子黒板を使ったプレゼンテーション

地域のつながりを踏まえ、自分が何をできるのか考える経験を通して、地域住民の一員として意識が高まったり、自分の役割を強く感じたりすることができた。また、堂々とした意見発表を級友や保護者の前でできたことで、自分に自信を深めた児童も多かった。地域とつながりの中に自分の存在意義を見いだしていく活動は重要なので、今回の実践の反省を生かして継続していきたい。

(6) タブレットPCを活用した自己評価・相互評価の活用（ICTで振り返る）

① 特別支援学級（自閉症・情緒学級）での特別活動：「題材名 想像して考えよう」

ソーシャルスキルトレーニングを継続して行い、コミュニケーションのスキルについても合同学習の取組で行ってきた。児童にはコミュニケーションのスキルが、徐々に付いてきたが、相手の話から相手が意図していることを想像したり複数の意見を聞いて自分の考えをまとめて答えたりするスキルの難易度は高いことが分かった。そこで、基本に戻り、上手な聴き方を実践し、継続して指導しながら話を集中して聞くことを指導した。その中で、友達と関わり合いながら言葉遊びやゲームをすることで想像力を高めたり皆の意見を聞いてテーマに合った質問や回答ができるようにしたいと考えた。

上手な聴き方では、「聞き上手なアナウンサーになろう」というめあてで質問事項や聴き方のポイントなどを用意した。雰囲気盛り上げるためにマイクを用意しタブレットPCでインタビューの様子を撮影し振り返りに活用した。しかし、基本的な相手に顔や体を向けることはできても、視線を合わせたりうなずきながら聞いたりするなどの活動は難しかった。もっと繰り返し決められた言葉や流れで練習することが必要であると感じた。

## ② 第5学年学級活動(2)での授業実践「自分らしさってなんだろう」

本時のめあては「自分自身のよさについて再確認し、それを生かしながら、友達と協力して生活していこうとする意欲を高める。」ことである。

授業に先がけて行った意識調査によると、「自分のよさに目を向けている」の肯定値が61%、「自分にはよさがある」の肯定値が50%であった。「自分には欠点があると思う」では67%が「あると思う」と回答している。一方、「友達のよさを見つけることができている」の肯定値は80%であった。このアンケートから、「友達のよさ」には着目できる児童が多いが、「自分のよさ」に気付いている児童は約半数であるという実態を見取ることができた。そのため、授業では相互のよさを認め合う活動を取り入れることとした。

ワークシートとタブレットPCを併用し「友達のよさを見つける」ようにした。「よいところが見つけれられた場面の写真でも動画でもよい」とし、各班1台ずつタブレットを配付したが、シャッターチャンスに合わせて撮影することは難しかったようである。そこで、これも曜日で分担し、個々に撮影日を設け、休み時間や給食時、清掃時、授業中、担当日に限り、いつでも撮影してよいことにした。それにより、少しずつ記録が蓄積されるようになった。

そして、学級活動の時間をお互いの良さを認め合う授業を行った。「よいところ発見カード」やタブレットPCの記録を示しながら、グループごとに友達のよさを伝え合うようにした。

実践の成果は、児童のアンケートとQUテストから分析した。アンケートは、4月、6月、9月、12月と4回調査したが、人間関係力の指標となる、「学級の絆」、「先生の支え」、「友達の支え」の肯定値が上がってきた。「Q-Uテスト」では、1回目の1学期(7月実施)に比べて、2学期(12月実施)は「学校生活満足群」の児童が41%から50%に伸び、一方「不満足群」は24%から21%にわずかであるが減少している。これらの結果から、話合いの活動の活性化で互いのことを理解し合い、交流する力の人間関係力がわずかではあるが伸びていると考える。タブレットのよさは、「客観視すること」である。効果的な写真かどうか、付箋のコメントとリンクしているかどうかを画面で説明できるように、普段の耕しが必要ではないか。「今日は○○さんの日」というように設定し、帰りの会等で話合いをもち、よさの付箋を貯金することも大切であると思われる。

## 5. 研究の成果

3年生以上の児童を対象として、平成30年3月にアンケート調査を行った。(3年生118名、4年生96名、5年生102名、6年生102名、当てはまると答えた児童の数値のみ示した。6年生は、4月に実施した全国学習状況調査の結果を上段に示した。)

児童への質問内容	第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
自分にはよいところがあると思いますか (6学年の全国平均は39%, 39%)	34%	37%	36%	44%	47%	21%	25%	47%
							34%	37%
学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりすることができていると思いますか (6学年の全国平均は27%, 41%)	ややあてはまる	あてはまる	ややあてはまる	あてはまる	ややあてはまる	あてはまる	43%	27%
	37%	33%	44%	35%	42%	30%	34%	43%

自己肯定感については、全国平均とほぼ同じ結果であった。第6学年は4月に比べ「当てはまる」と答えた児童が減り、「やや当てはまる」と答えた児童が増えている。思春期を迎え、自分へのとらえ方が変化していることが影響しているかもしれないが、当てはまるとやや当てはまるを合計した数はほぼ同じなので、アンケート結果からはあまりかわっていないと考えられる。

それぞれの実践の直後のアンケートでは「うれしかった」や「友達に認められてよかった」と答えていたので、継続的な実践を行っていく必要があると思われる。

話し合いについてはどの学年でも向上していると思われるので、映像や写真を活用して行うことは効果的であったと考えられる。

## 6. 今後の課題・展望

- (1) 児童の活動の様子など得られた記録を、デジタルポートフォリオとして活用していく方法
- (2) 他校との交流を行いやすくするための期間割りの工夫改善
- (3) チャット交流室の設置によるデジタル交流の簡素化
- (4) 多量なデータの管理などを受け人的配置の工夫
- (5) デジタル情報とアナログ情報の融合や活用の方法
- (6) 教職員のデジタルスキルアップのための校内研修の企画運営

## 7. おわりに

「恵まれた環境を生かす。」これが本研究実践のスタートであった。地域の人々から学ぶ、地域そのものを学習する、地域の人々の協力を得て学習を進めていくなど、地域を活用する際に、タブレットPCの特性を生かすことは大変有効であった。自分の発表、普段行っている当番活動や係活動、委員会活動の様子を電子黒板上で確認することは、驚きであり大きな喜びであった。それにより自分良さに気づいたり、周りから認めてもらい嬉しさを感じたりすることができた。

タブレットPC、電子黒板は便利なツールであるがそれを生かすのは我々教師の発想と実践による積み重ねである。今回の実践を生かして、自己肯定感の向上という大きなテーマであるが足下からこつこつと努力を重ねていきたい。貴財団の助成によりこのような実践の機会が得られたことに大変感謝しております。ありがとうございました。

## 8. 参考文献

生徒指導・進路指導センター 生徒指導リーフ「『自尊感情』？それとも、『自己有用感』？」  
国立教育政策研究所